

附中だより2月号

令和7年2月14日

兵庫教育大学附属中学校

校長 富田 明徳

令和6年度小学校中学校合同研究大会開催



1月25日(土) 令和6年度研究発表大会を開催しました。今年度は、附属小学校との合同開催2年目となります。その目的は、本附属学校がコミュニティ・スクールとして地域の「知の拠点」となることをめざし、合同実施することで、来られる先生方にとって、大学とのSTEAM教育の共同研究で得た成果を小中両方同時に学ぶ機会とすることです。さらに、附属小学校・中学校としては、大会開催の周辺業務、例えばオンライン配信や参加者集約業務や研究紀要作製業務等を出

来るだけ効率的に進めることで、教員は授業研究の充実に時間かけることができます。

また小中学校PTAの皆様も合同実施により協力し合って分担することで負担軽減をめざしています。附属中学校古跡会長、附属小学校藤本会長、誠にありがとうございました。

中学校では4本の研究授業を行い、教科分科会、さらにキャリア探究総合の実践発表も開催しました。どの会場も満員で、北は北海道から南は鹿児島までの全国各地から小学校中学校併せて400名を超える多くの先生方が各地から集いました。昨年以上に先生方の学びの場となることができたことを大変うれしく思います。

講演会には、加治佐学長も参加され、附属幼・小・中学校が共同で取り組んでいるSTEAM教育について真摯に考える機会となりました。附属小学校泉谷研究主任と附属中学校和田研究主任が登壇し、日頃からご指導いただいている武庫川女子大学教育学部藤本勇二教授と兵庫教育大学大学院森山潤教授と「日本型STEAM



教育の現在地～探究と子どもを主語にした学びの視座から～」と題してのトークセッションのような形で、取組の進捗状況を率直に振り返り、今後の展望を考える、大変充実した内容となりこれも大盛況でした。



今年度は、小中学校とも教員と生徒による年間最大の取組の発表の場を、保護者の皆様にも参観していただけるようにしました。本当にたくさんの保護者の皆様、ご参観いただきありがとうございました。また、PTAの予算で、バスによる児童・生徒の通学の利便性を図ることもできました。毎年同じことを繰り返すのではなく常に新しいことにチャレンジしてさらに来年度の改善につなげていきたいと思ひます。

おわりになりましたが、朝早くから駐車場整理や受付、校内案内係の設置等様々な所でご協力いただいた保護者、PTA役員の皆様に厚く御礼申し上げます。皆様のおかげで大変素晴らしい研究大会となりましたこと心から深く感謝いたします。誠にありがとうございました。



キャリア教育講演会

2月6日(木) 2年生は5、6校時に落語教育家の小幡七海さんをお迎えしてキャリア教育講演会を開催しました。これは昨年度までの立志式の取組につながるものです。



小幡さんは元小学校の教員で、質のよい笑い(人を傷つけない笑い)を通して、一人一人の個性が素晴らしいものであることや、レジリエンス(耐久性)を高めて人間関係をよりよいものにすることを説かれました。また、一般社団法人笑ってMe(わらってみ)を立ち上げられた経緯をお聞きました。落語を通して、人を傷つけない笑いの対話をどうするかの講習を通して、生徒たちは、人を傷つける笑い、人を傷つけない笑いを体験しました。笑い声が絶えなかった素敵な講演会になりました。

麦踏み体験を行いました

2月7日(金) 1年生は校外学習で麦踏み体験に行きました。午前中は「マルヤナギ小倉屋」社工場の職員の方からもち麦のお話を聞き、工場見学を行いました。その後「屋敷地区内もち麦ほ場」で麦踏み体験をしました。麦は踏みつけることでしっかりと根が張り、育ちが良くなるそうです。



生徒たちは知識だけの学習に終わらず、植物を育てることを体感し、もち麦の生産現場への理解や関心を今まで以上に高めることができました。今回の経験が今後の探究学習でどう生かされるのか楽しみです。午後は播磨中央公園で昼食をとり、様々な自転車に乗ったり、レクリエーションをしたりして、生徒も先生も全身を思いっきり動かして遊び、楽しみました。

少年の主張兵庫県大会入賞

9月28日(土) 神戸市けんみんホールで行われた「少年の主張中学生のメッセージ2024」において、北播磨ブロック代表として本校2年生の〇〇〇〇さんが「自分らしさ」(裏面に掲載)という題で意見発表し、奨励賞を受賞しました。発表の動画は公益財団青少年本部のHPで見ることができます。今回発表文集が学校にも届きましたので、皆さんにもご報告できました。なお、北播磨地域では優秀賞3名のうち2名が本校生徒でした。北播磨地域の受賞者は以下の通りです。

最優秀賞 2年 〇〇〇〇さん
優秀賞 2年 〇〇〇〇さん 1年 〇〇〇〇さん

(北播磨青少年本部だより第24号掲載(R7.3発行))

加東市人権作文の紹介

2月1日(土) 加東市人権を考える市民の集いが開催され、本校1年生〇〇〇〇〇さんが「あたりまえでない家族の大切さ」と題して朗読しました。(裏面に掲載)



1/16 1年百人一首大会



1/17 全校地震避難訓練

今後の主な行事予定

- 17日(月) 公立特色推薦入試、附属学校保健委員会
- 18日(火)～20日(木) 期末テスト
- 19日(水) 令和7年度新入生入学説明会
- 23日(祝) 天皇誕生日
- 24日(月) 振替休日
- 3月
- 7日(金) 3年生を送る会、3年生給食最終日
- 11日(火) 第41回卒業式
- 12日(水) 公立高校学力検査(発表19日)

※トピックスはHPにも掲載しています。是非ご覧ください。

以下に、二人の作文を紹介します。中学生時代に物事を深く考えることはとても重要です。また、書いてみることは自分の考えを整理することになります。来年も是非深く考えて素晴らしい作品が生まれることを期待しています。

「自分らしさ」

2年 ○○ ○○

「普遍的」私を表すための言葉ではないかと思う。普遍とは、特殊などの対義語で、学研の新レインボー小学国語辞典によると「すべてのものにあてはまるようす」という意味だ。私がこの言葉を意識し始めたのは中学一年生のときの友達との会話がきっかけだ。友達のことを個性的だと言うと、私は普遍的だと言われた。なんとなく調べてみると個性がないことのたとえらしかった。当時私は傷ついたわけではなかったが、自分は特別誇れるものがないんだと実感させられた気がした。でもそれよりも自分に対して普段感じていたものが言語化された感じがして、なんとなく納得してしまった。そこからずっと頭の中に普遍的という言葉が残っている。

初めて自分のことを個性がないと思ったのは中学校入学の直後だ。私が通っている中学校は色々な小学校から人が集まっているため、入学したときは初めて会った人ばかりで友達作りが大変だった。私が見知りだったのかもしれないが、当時はよく「自分らしさがないからだ」と思っていた。個性は人と違う特別な部分だ。私はその特別な部分に惹かれて人を好きになる。なら個性のない私は好かれまいだろう。そう考えて、私は自分が嫌になった。

友達の間では私もキャラがある。友達が好きになってくれた部分だと思うと気に入っている。でも初対面の人や関わりが浅い人からは、しっかりしている、まともだとばかり言われる。「当たり障りがない」と言われたこともある。褒めてくれていたのだが、まるで可もなく不可もないと言われているような気分になる。周りを見てみると色々な個性を持った人がいる。特に総合の探求学習では一人ひとり違ったことをするため、それが強く表れる。部活動の美術部でもそうだ。キャラクターの模写をしていると、隣で誰かが独自の世界観の絵を描いている。やりたいこと、好きなことが決まってい、自分をしっかり持っている人は私には眩しく見える。数学の授業で毎回褒められていたり、体育で無双していたり、得意なことを突き詰められている人も同じだ。そういう人は他に誰かが代わりになることができない、唯一無二の存在だ。私はそれに強く憧れるとともに、劣等感を抱いているのだと思う。しかし、私は普遍というものに価値を見出したい。個性がないといった意味がある一方で、「全てのものに当てはまる」という意味もある。つまり普遍的なものはいつ、どこで、誰が見ても受け入れられるのではないかと思う。個性が強すぎると、誰かが好きなものを別の誰かは好きではないこともある。そう考えれば、普遍的なものもいいなと思える。どこにでもあるものは、ありきたりで個性がないように思えるかもしれない。しかし誰もが必要としているからこそ、どこにでもあるのだろう。普遍的だからこそ価値があって、多くの人に認められる。個性がないのではなくて、私の長所だったんだと気付いた。

どこかに、私と同じように普遍的な自分を悪く思っている人がいるなら、この作文を書くことを通して思ったことを伝えたい。きっと個性で溢れている世の中、自分には到底思いつかないようなものや意見は多いはずだ。それを見て自分はずまらない人だと劣等感を持つのはやめにした。一部からは受け入れられないものもある中で、どこに行っても認められ、適応できるというのは強みになると思う。だから自分に自信を持って生きたい。普遍的なもの立派な個性なのかもしれないし、私の代わりはいないのだろう。そう思った時、今までより自分が好きになった。

将来



「あたりまえでない家族の大切さ」

1年 ○○○○○

僕の家族には、産まれたときから大きな障がいをもつ妹がいます。異なる種類の薬や、複数の薬を組み合わせて投与しても発作をなかなかコントロールできなかったり、身体的な障がいもあり、健常者なら当たり前のようにできることが、できなかったりします。だから、妹ができないことは僕や家族がサポートしています。



具体的には、お風呂にいれたり、ご飯を食べさせてあげたりというものです。ご飯は飲み込みやすいようにペースト食にしています。どちらのサポートも妹の命に関わるものなので、毎日必ず続けなくてははいけません。大変ですが僕は今までこれらのサポートを嫌になったりしんどくなったりしたことは1度もありません。妹は家族の一人だからです。僕は妹のサポートをするとき、心掛けてことがあります。それは、妹の立場にたって考えることです。妹がやりたいこと、考えていることが、障がいをもっていない人と同じように自由にでき、自由に生きることができるよう妹の気持ちを考えてサポートしています。

僕は妹と生活する中で家族の大切さを知りました。妹のサポートは、お母さんやお父さんが中心にしていますが、お母さんやお父さんはいつも仕事の都合で、帰るのが遅くなります。しかし、どんなに仕事で疲れてしんどくても必ず妹の面倒を見ています。僕はそれを当たり前だとは思っていません。なぜなら、世の中には仕事で疲れたから、眠たいからなどの理由をつけてほったらかしにする家庭もあると思うからです。僕の家族はどんなに大変な状況でも、妹をサポートできる、かけがえのない家族だと思います。

僕自身は、このような環境の中、小学校1年生から始めた大好きな野球を中学生になっても続けさせてもらっています。毎日忙しい中、お弁当を作ってくれたり、遠い場所でも送迎してくれたり、とても助かっています。これは題名にあるように僕が家族の大切さについて知ることができたきっかけです。家族の誰かが欠けてしまうことによって障がいのある妹の面倒をみる人がいなくなってしまうと、送迎などができず、野球を続けることができなくなってしまう。しかし、家族のみんながいて、それを支えてくださる人達がいるおかげで、大好きな野球ができています。

このように、お父さんとお母さんは、妹の面倒が大変だからといって僕が我慢することもなく、僕の好きなことややりたい事も同じように大切にしてくれます。つまり、妹のことも僕のことと同じように大切にしてくれているのです。障がいをもっている人も、もっていない人も、一人の人間として、家族として大切にされていることをいつも実感しています。なかなか言葉には出しづらいですが、たくさん助けてもらっているのだから「ありがとう」と伝えたいです。

最後に、障がいをもった子ども達や大人の人達について伝えたいことがあります。僕は、障がいをもっている人も、もっていない人も、同じように接することが大切だと思います。妹と生活して一番感じることは、一生懸命生きようとする力です。「障がいがあるから」「障がいをもっているから」という言葉を耳にすることがあります。障がいがあっても、差別されることなく平等に生きていくことができると思います。障がいがあるからといって本人や周りの人が何かを我慢したり、あきらめたりする必要はないと思います。障がいをもっている人も、もっていない人も、生きていけば同じようにどこかで苦しんだり、同じように喜びを感じたりすることができます。それを僕はたくさんの方に共感してほしいです。誰もが自信を持って堂々と胸を張って生きていける社会になればいいなと思います。